特　集

アジ研流
読書案内
―研究者が薦める3冊

小説と研究の間

重冨 真一

●松本清張『昭和史発掘』（新装版）全九巻（文芸春秋社、春秋文庫、二〇〇五年）。

推理小説作家の松本清張が、二・二六事件（昭和一一年）とそれに至るまでに起きた事件を詳らかに描いた作品である。その詳細さは並大抵ではない。供述調書、公判記録、回想録、談話（聞き取り）など、事実に関わるあらゆる情報を集めている。そして著者は、これらの情報をひとつひとつ吟味し、事実に迫っていく。怪しいと思われる情報も紹介して、その検証過程まで書いていくから、あたかも敏腕刑事と共に難事件に取り組んでいるような気分になる。

たとえば二・二六事件決行の章（第七巻「諸子ノ行動」）で、クーデタ側は皇居を占拠して天皇を自分らの統御下に置こうとしたが失敗に終わる場面がある。それはクーデタの成否を決める重要な計画であったろう。しかしそれは実現せず、また事後に実行側もそれについては語らなかったから、本当のところがどうだったのかつまびらかでない。これを筆者は、当事者の証言や軍側の記録、クーデタ軍の動きなどから推論していく。推論なので、「思われる」「だろう」で終わる文章が頻出する。

研究論文を書くときに、この手の曖昧な表現は、しばしば禁句とされる。しかしこの作品を読んでいて、「思われる」と書けるような研究はかなりレベルが高いのではないかと考えるようになった。何かを明らかにしたいとき、その何かに向かって事実を踏んで進んでいく。しかしこれ以上、どうしても事実が出てこない、という崖っぷちがある。到達したい「何か」は、その先にある。「何か」に一歩でも二歩でも近づこうとすれば、そこは崖の外だから推論を使って空中を進むしかない。そうした推論に説得力を持たせているのは、じつは推論に入る前に敷き詰めた事実の凄さである。

こうした推論の場に読者を連れ回すことができるのは、清張の筆の力に依るところが大きい。研究においてもこうした情報収集・思考過程を経るのだが、その結果を書くときには、成果につながらなかった、重要でなかった部分は切り落とす。そして骨格とそれに関わる肉だけを書くものである。研究者の思考過程全部（ボツになった思考やデータまで）論文に書かれたら、読み手はたまったものではない。ところが清張はそれを敢えて行い、しかも読ませてしまうのだ。

●宮本常一（つねいち）『忘れられた日本人』（岩波書店、岩波文庫、一九八四年）

農民出身の民俗学者で、日本を徹底的に歩いて調査した宮本常一の代表的作品。農村のお年寄り達から聞き取った庶民の生活が描かれる。その内容は聞き取ったそのままに書かれたのではないかと思われるほどの詳細さである。あたかも録音テープ起こしのようなのだが、調査に携帯できるテープレコーダーなどなかった時代のこと。すべて宮本のメモと記憶によっている。宮本が村々を歩いたのは戦前から戦後間もなくの頃であり、文字どおり徒歩の旅が続く。しかも農家に泊まっても迷惑をかけないように、一斗（一五キロ）あまりの米を背負っていたという。私もタイの村をずいぶん「歩いた」つもりであったが、もう「歩いた」などと言うのはやめておこう。

清張が自身の思考過程に読者を連れ回したとすれば、宮本は調査の場に読者を連れ回している。読者は宮本と共に歩き、村人から話しを聞き、村人の様子を見ることになる。通常の研究ならば、そうした情報は研究者のデータベース

にはなっても、そのまま書かれることはないだろう。宮本はあえてそれをすることで、普通の研究ならばそぎ落とされてしまった血と肉を描き、そこにメッセージを込めている。骨組みとなる論理や理論とは違うものでも、研究は十分に感動的で影響力をもち得るということを、この作品は証明している。

本書の「あとがき」で、宮本は次のように述べている。「私の一番知りたいことは今日の文化をきずきあげてきた生産者のエネルギーというものが、どういう人間関係や環境の中から生まれて来たかということである。」（三〇九ページ）。じつは本書を読んで、もっとも衝撃を受けたのは、この一文に出会ったときだった。手あたり次第情報を拾い集めているように見えるのだが、宮本にとって「知りたいこと」（課題）ははっきりしていた。調査課題が明確だと、しばしばそれから外れるものは拾わなくなり、書くときにも省いてしまう。ところが宮本は、その両方をやってのけている。

じつはこの一文には、私にとってもうひとつの深い含意がある。歴史家の網野義彦が「解説」で論じているのだが、宮本は民族的な事象や言葉を拾い集めて整理するのではなく、そうした事象を実際に庶民が営む生活の中で位置づけようとした。そう考えると、「エネルギーというものが、どういう人間関係や環境の中から生まれて来たか」という問いの意味が見えてくる。エネルギーを生む要素をばらばらに取り出すのではなく、それが働く地域社会、生活の場の文脈で捉えよう。それは地域研究の課題でもあると思うのだ。

●和田傳『日本農人傳』全五巻（家の光協会、一九五五年）

本書は農民小説作家の和田傳が、日本の老農と呼ばれる人々を伝記的に描いた短編集で、その巻五に、「協同の旗―清水乃衛―」という小品が収められている。これは協同組合を、日本で最初に、誰に教わるともなく作った貧農の話である。

作品は乃衛が土間で藁を打つ場面で始まる。実はこの藁打ちは、乃衛が中心になって作った積縄組合の活動なのである。部落の有志二六人で、毎日夜なべ作業で藁を打ち、縄を綯うことに決め、それを共同で販売し、組合の資金にしようというのであった。乃衛は自分のノルマを終えると、寒風吹きすさぶ中に出て、他の会員が取り決め通り作業を終えているか見て回る。

乃衛が組合を作るには、次のようなきっかけがあった。ある日、借金を返しに行った乃衛は金貸しに、なぜこんなに高い金利をとるのか、と尋ねた。「返さない者がいるから、返す者からその分高くとるのだ」という高利貸しの答えを聞いた乃衛は、それならばみなが正直に返せば、利子は安くなるはずだと考えた。そしてこの組合を作ったのだった。縄などの共同販売の収入は、会員に低利で融資されるようになった。化学肥料の導入、種籾の塩水選なども組合で導入した。

ある日、乃衛は突如村役場から呼び出される。農商務省の高官、平田東助（後に農商務相）が乃衛を訪ねてきたというのだ。平田は当時、品川弥二郎とともにドイツのライファイゼン型協同組合を導入すべく産業組合法の制定に奔走していた。ところが法律に先駆けて日本にも協同組合ができていたと知り、乃衛の話しを聞きに来たのだった。乃衛の実践に感動する平田に、野良着のままの乃衛は、うつむいて恥ずかしそうに答える。「私どもは何も知りません。誰にきいたのでも、教わったのでもなく、ただ人間らしく、正直に、正直者が馬鹿を見ると言うことのない世の中にしたいものだと…」。

どういうわけかこの作品を読むと、私は涙がこみ上げてしかたがない。何処にも悲しい話しは書いてないし、さして感動的なドラマも無いのだが、何度読んでも同じことなのである。なぜなのかと考えてみたが、どうも私の原体験のようなものがあるとしか思いつかない。それは私の奥深いところにあるようで、自分でもはっきりとは分からないのだが、正直に汗水垂らして働く無名の人々が何かを成し遂げる姿に、揺さぶられるところがあるように思える。そして自分の生き方や研究テーマは、この感情によって強く縛られていると、改めて思うのである。

（しげとみ　しんいち／アジア経済研究所　東南アジア研究グループ［タイ地域研究・農村社会研究］）